

ヘーゲルによる〈インドの天文学〉理解 ——『歴史哲学』、1822/23年「世界史の哲学」講義、 グリースハイム・ノートの差異——

Hegels Verständnis für die indische Astronomie.—— Die Verschiedenheiten unter seiner *Philosophie der Geschichte*, seinen *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte 1822/23*, und Griesheims Nachschrift.

神山 伸弘

KAMIYAMA Nobuhiro

要 旨

ヘーゲルは、1822/23年冬学期の「世界史哲学」講義において〈インドの天文学〉に関して詳細な言及をしている。しかしながら、ガンス版ないしカール・ヘーゲル版の『歴史哲学』では、それが明確に跡づけられず、かえって〈インドの天文学〉のいかがわしさのみが伝わる格好になっている。しかし、〈インドの天文学〉を詳細に伝える「世界史の哲学」講義のイルティング版にしても、集積テキストの編纂という方法論が禍して、ヘーゲルが〈インドの天文学〉をそれなりに評価していた文脈を読み取ることが難しいものとなっている。

本稿では、イルティング版とグリースハイム・ノートとを対比するなかでイルティング版の問題点を指摘しながら、さらに〈インドの天文学〉を理解するために必要な知見を確認する。そして、そのことを通じて、ヘーゲルが「世界史哲学」を講義するさい、経験的知識を〈情報知〉として可能なかぎり収集している姿を浮き彫りにしていく。

はじめに——なぜ〈インドの天文学〉なのか？

ヘーゲルの『歴史哲学』で「インド」論を議論するさい、その天文学について主題的に言及するとされるなら、それは、あまりに特殊で瑣末なことへのこだわりと思われるかもしれない。本論は、このような評価を蒙る運命にあると覚悟しておこう。ただ、本論にとっては、このような一般的な「思われ」の評価を確認しておくことには、重要な意味がある。

周知のように、一般にヘーゲルの『歴史哲

学』とされるものは、1837年にヘーゲルの弟子ガンスが記念刊行会版全集第9巻として編纂したもの⁽¹⁾を、1840年にヘーゲルの息子カール・ヘーゲルが改訂したもの⁽²⁾である。グロックナー版⁽³⁾は、このカール・ヘーゲル版の写真版で、ズーアカンプ社版⁽⁴⁾のテキストも、基本的にそれに依拠している。これに対し、哲学文庫版であるラッソン版⁽⁵⁾は、このカール・ヘーゲル版を批判して編纂された。本邦で

は、グロックナー版に依拠して、武市健人が鈴木権三郎訳を改訳した岩波全集版とそれに基づく岩波文庫版⁽⁶⁾があったが、今日では、岩波文庫版は長谷川宏訳⁽⁷⁾となっている。

ヘーゲルは、『エンチクロペディー』あるいは『法の哲学』の一部の要綱としてしかみずからの「世界史」を公刊しなかったため⁽⁸⁾、ヘーゲルのいわゆる『歴史哲学』なるものは、ヘーゲル自身のわずかな手稿⁽⁹⁾ および聴講者のノートを再構成する以外に通読できるものがない。とくに、ヘーゲル自身のわずかな手稿は、世界史に対する哲学のかかわり方を一般的に論ずるものでしかないため、歴史事象それ自体に関するヘーゲルの議論については、聴講者のノートに依拠するほかに手がかりがないのである。このさい、当然ながら聴講者のノートに粗密があることを考えれば、さまざまなノートを集積して豊富な内容を構成したくなるのが人情というものだろう。ガンスおよびカール・ヘーゲルの努力は、ヘーゲル自身の手稿とともに、1822/23年冬学期以来1830/31年冬学期に至るまで隔年で5回行われたヘーゲルの「世界史の哲学」講義⁽¹⁰⁾ 全体を集積することに向けられたといっておよい。

さて、以上の確認は、本論の主題からまったくかけ離れているように思われるかもしれないが、ヘーゲルの『歴史哲学』において〈インドの天文学〉に関する言及に触れうるとすれば、それは講義ノートまたはその編纂に依拠する以外にない、ということぐらいは指摘しえたであろう。このように、それに触れるためには、一般に、カール・ヘーゲル版（本邦では加えてその翻訳）に依拠することになるだろう。そして、

ごくごく当然にそうしたときには、ヘーゲルの『歴史哲学』において〈インドの天文学〉への言及の貧弱さに気づき、翻ってこれを主題化することに意味のなさを感じるに違いない。

ヘーゲルの『歴史哲学』では、ズーアカンプ社版を見るかぎり、Astronomie, astronomischなる言葉が「インド」論で都合3回登場する⁽¹¹⁾。しかしながら、その一つは、地理学や代数学に並べての学問名としてのそれであって（*Suhrkamp*, 202; *Lasson*, 356）、その内実が語られるものではない。ほかの二つは、「天文学」に関わりそうなところでもあるが、一般に『歴史哲学』で読まれているかぎりでは、信頼性のない学問を揶揄するために持ち出されている⁽¹²⁾。

すなわち、その一つは、こうである。「インドの書物の中にも年代は挙げられている。しかも大きな数字が出ているが、それは時によると天文学的意味のものであり、大抵は全然勝手にこしらえ上げられたものである場合が多い」⁽¹³⁾。これは、我々が巨大な数を「天文学的数字」⁽¹⁴⁾と日常的に語るのと同じことであり、もちろん「天文学」そのものの内容には関わらない。

もう一つは、「天文学」の中身に若干言及している風情がある。すなわち、「その外の史料は非常に古い時代のものである天文学的な書類になるだろうか。コールブルックはこれらの文書を丹念に調べた。しかし、筆写本は婆羅門が秘蔵しているためにこれを得ることが甚だ困難であるのと、その上に多くの改竄のために非常に歪められている。星座に関する記述などは往々矛盾していたり、また婆羅門が自分の時代の状況をこの古書の中に挿入したりしていることがわ

かった」⁽¹⁵⁾。これは、「星座に関する記述」への言及の点で、「天文学」に直接言及しているものといえなくもないが、文脈的な役割としては、インドを論ずるための史料として「天文学的な書類」が意味をなさないとするものであり、「天文学」そのものを論ずるものではない、といえるだろう。少なくとも、この叙述のかぎりでは、〈インドの天文学〉の内容にまでに言及があると言い張ることができない。

したがって、いずれも〈インドの天文学〉そのものには無関係に思えるのだが、このさい深刻なことは、その表現に附随して〈インドの天文学〉そのものが、「改竄」「矛盾」という評価言で見下されている事実である。すなわち、インドの歴史を語る史料にとどまらず、〈インドの天文学〉にまでもヘーゲルが否定的な評価を下している、という理解を、カール・ヘーゲル版の『歴史哲学』が流通させていることである。

こうしてみると、ヘーゲルは、その『歴史哲学』においては、〈インドの天文学〉を見下してまともに取り上げなかった、という理解になるだろう。こういう理解に対して、本論は、次のことを問題としたい。

第1に、なによりも根本的には、一般にヘーゲルの『歴史哲学』になるとほとんど積極的な意味が失われる〈インドの天文学〉に関する議論が、本論が解明するように、ヘーゲルの講義自身ではその逆の意味になる、という事実を照らしたとき、ヘーゲルが〈インドの天文学〉を

見下していたという理解が成り立つのかどうか、インドの名誉のためにも、またヘーゲルの名誉のためにも、再検討せざるをえない。

第2に、そのように講義録の編纂のなかである種の議論が選択的に見下されるのだとすれば、解釈者の意識構造を問題とせざるをえないだろう。すなわち、聴講者自身にせよ、あるいは文献学的な正当性を主張してその講義録を編纂する者にせよ、系統的にある種の議論が見下されてしまう事情を説明する必要があるはずである。

本論では、まず、イルティングラの編纂によるヘーゲルの1822/23年冬学期の「世界史哲学」講義とグリースハイム・ノートとを〈インドの天文学〉関連のところで比較対照し、これに関するヘーゲルの議論を浮かび上がらせると同時に、イルティングラの編纂によるテキストに接するさいの一般的な留意点を明確にしたい(第1節～第3節)。そのうえで、〈インドの天文学〉に関する言及がそれについて概略ですら無知である我々にとって意味あるものとなるために必要な知識を今日的な学問的到達点に照らして補充しつつ、さらにヘーゲルがそのような〈インドの天文学〉に関する知見をどのようなかたちで得るにいたったのか、ヘーゲルに接近可能な資料を探索しながら、ヘーゲルが講義で伝えたかった内容について理解に達したい(第4節)。そして、本論を締め括るにあたって、ここで〈インドの天文学〉を取り上げたことの意味を回顧することにしよう。

1 イルティングラによるテキスト編纂

大学の講義を学生がノートに取る場合、学生が内容を選別したり聴き落としたりすることも

あるから、最初からノートに残らない内容も出てくるのは、当然のことであろう。したがって、こうしたノートの場合、講義内容が不穏当か否かにかかわらず、そもそも筆記の時点で講義録削除が起きているわけである。

そこで、その講義の内容を詳細に再現しようとすれば、複数のノートと比較・対照しながら文脈的な整合性を考慮しつつ、当該削除部分の掘り起こしをしていく以外に方法はない。

イルティング主導で編纂されたヘーゲルの1822/23年冬学期における「世界史の哲学」講義録（以下、テキストとしては、「イルティング版」ともいう）⁽¹⁶⁾は、このような方法で集積されたテキストである。すなわち、イルティングらは、ベルリン国立図書館所蔵のグリースハイムのノート（「1822/23年冬学期にヘーゲルが講義した『普遍的な世界史の哲学』」⁽¹⁷⁾）、ソルボンヌ大学図書館所蔵のホトーのノート（「1822/23年ベルリン大学冬学期にヘーゲル教授の講義による『世界史の哲学』」⁽¹⁸⁾）、ベルリン国立図書館所蔵のケーラーのノート（「哲学的な世界史」⁽¹⁹⁾）の三つを源泉にヘーゲルの1822/23年冬学期における「世界史の哲学」講義を再現してみせた。

従来、一般にヘーゲルの『歴史哲学』として提供されてきたテキストは、「はじめに」で指摘したようにヘーゲルがベルリンで行ったすべての講義をまとめるかたちのものであった。これに対し、イルティング版は、1822/23年冬学期に限定して「世界史哲学」講義を再現する方法を採用した。これは、イルティングがヘーゲルの「法の哲学」講義録⁽²⁰⁾を編纂したやり方である「個々の講義を再構成する」方法に準拠した

ものである（*Ilting*, VIII）。5回の講義をすべて集積するという方法では、イェシュケの言い方にしたがって、「世界史の哲学」をめぐる10年にも及ぶ講義活動を展開してきたヘーゲルの思考の「あらゆる発展史的な差異を消し去って平板化し、ヘーゲルのコンセプトを分からないものにまで破壊することが珍しくない」ことになるから、単一の講義を再現することは、この弊害を除去することになるとされる（*Ilting*, 530）。

もっとも、イルティングが「法の哲学」講義録を出版したさいには、当初は基本的に、個々の聴講者のノートそのものを翻刻する態度で臨んでいる⁽²¹⁾。イルティング版の「世界史の哲学」は、個々の聴講者のノートをそれぞれ別々に翻刻するという方法をとらずに、先に挙げた三つのノートの内容を一つのものに集積して新たなテキストを編纂することで成り立っている。このさい、より具体的には、「量的に最善のノート（主要テキスト）」を基礎に「量的に少ないテキスト（監査テキスト）」によってそれを訂補するとされる。なお、主要テキストからかなりかけ離れた異文や補足は、脚注で示すとされている（*ebd.*）。

こうした集積テキストは、講義を参照しようとする者が「苦勞の多い文献学的な作業」を免れるためのもので（*Ilting*, 531）、それはそれとしてとてもありがたいものであろう。イルティング版は、先の三つのノートのうちホトーのノートを主要テキストとしたが、グリースハイムのノートは、ホトーのノートと一致する部分が多いため、二つのノートで連続したテキストを加工したとする（*ebd.*）。もっとも、あるノートにしかないテキストも、引用であったり、文脈上

の派生であったり、その拡張であったりしたときには集積されるとされているから (ebd.)、逆に、我々が接しえている集積テキストの基本的な内容がいずれのノートにも必ずしもあるわけではない、ということは、その編集方針からしてごくごく当然のことである。したがって、集積テキストは、「ヘーゲルが実際に講義で話したもの」(Ilting, 530) と理念的に想定される内容であって、逆に、個々のノートは、その内容

を選別したり聴き落とししたり、あるいは変形したりしたもののみならずなくなりそうだし(これは、テキストの編纂過程に照らせば、実は本末転倒した見方であろう)。もっとも、集積テキストの編成の実際を例示しているものに触れるかぎり (Ilting, 534f.)、いずれのノートでもほぼ同一の内容が記されているのだろう、という先入観を持ってしまうところがある。

2 〈インドの天文学〉関連テキストの対比

さて、本論では、ヘーゲルが「インド」論で行った〈インドの天文学〉に関する議論にのみ着目して検討する。イルティング版が未邦訳である事情、また文脈の流れを共通理解にして議論しなければならない必要から、まず当該箇所を対訳して示すことにする。また、筆者はグリースハイム・ノートのマイクロフィルム⁽²²⁾を参照するので、イルティング版のテキストの由来を確認するためにも、イルティング版とグリースハイム・ノート【図1】(28頁)との対比を行う。双方のテキストの一致・不一致が容易に分かるよう、原書の改行にこだわらず語を配置する。

なお、段落のはじめは、■で示す。本論での参照の便宜を図るため、冒頭からの段落番号を【】で示し、イルティング版およびその翻訳の場合、加えて文番号を〔〕で示す。また、イルティング版およびグリースハイム・ノートの原書頁を開始点冒頭に《》でルビを振る。欧文におけるイタリック、邦文における下線は、双方の異同箇所を示すが、煩を避けるため、必ずしも厳密には行っていない。なお、双方の異同箇所で見出すべきところは、さらにゴシックにしてある。双方のテキストの対応は、見開きで示される。

| イルディング版 | |
|---|--|
| 翻訳 | 原文 |
| <p>■ [1] [1] 出来事としての歴史は、人民の<u>継続的な教養形成における必然的な媒介項をなしている。</u>という<u>のも、</u>人民の過去は、<u>歴史的に人民の眼前になければならないからである。</u>[2] 人民は、<u>この歴史像のもとに固定したもの、</u><u>永続するものを持っている。</u>[3] <u>こうした固定したもの、</u><u>永続するものは、恣意や偶然態を廃棄するなにかになる。</u>[4] <u>固定した状態は、</u><u>そのようにして経験的にしか固定しえないものである。</u>[5] <u>人民のところ</u><u>で一つの性格が定着するのは、</u><u>もっぱら歴史によるものである。</u><u>すなわち、</u><u>もろもろの人民が以前の固定した状態を持っていることによるものである。</u><u>このことによって、</u><u>固定したものが政治的な側面にも入ってくるし、</u><u>政治的な体制が基礎づけられたり、</u><u>継続的に築かれたりする。</u>[6] <u>インド人は、</u><u>主観的な感性では歴史を持たないのだから、</u><u>客観的な感性でもそれを持たない。</u>[7] <u>インド人は、</u><u>[出来事としての] 歴史を持たないのだから、</u><u>まさにそれゆえに</u><u>真実の歴史を持たない。</u></p> <p>■ [2] [1] <u>統治年数や</u><u>インド人がいう</u><u>歴史上の期間</u><u>などに関して</u><u>インド人の</u><u>ところで</u><u>[見受けられる]</u><u>大きな数は、</u><u>いかがわしいものである。</u>[2] <u>この数に</u><u>多くの名前が結びついているが、</u><u>この数</u></p> | <p>■ [1] [1] ⁽²¹¹⁾ <i>Die historia rerum gestarum macht ein notwendiges Mittelglied in der Fortbildung eines Volkes aus; denn seine Vergangenheit muß ihm geschichtlich vor Augen stehen. [2] An diesen Bildern hat es ein Festes, Dauerndes. [3] Es wird zu etwas, wodurch die Willkür, die Zufälligkeit aufgehoben wird. [4] Ein fester Zustand kann sich nur so empirisch festsetzen. [5] Ein Charakter fixiert sich bei einem Volk nur durch die Geschichte, dadurch daß die Völker das Bild eines festen, früheren Zustandes haben, wodurch ein Festes auch in die politische Seite kommt, teils eine politische Verfassung begründet, teils ⁽²¹²⁾ fort gebaut [wird]. [6] Weil im subjektiven Sinn die Inder keine Geschichte haben, haben sie sie auch im objektiven Sinn nicht. [7] Eben weil sie keine historia haben, haben die Inder keine wahrhafte Geschichte.</i></p> <p>[2] [1] <i>Merkwürdig sind die großen Zahlen, die wir bei den Indern in Betreff auf Regierungsjahre, Perioden ihrer Geschichte etc. [finden]. [2] Mit diesen Zahlen sind viele Namen verbunden,</i></p> |

| グリースハイム・ノート | |
|---|--|
| 原文 | 翻訳 |
| <p>■ [1] ⁽²⁴³⁾ <i>Die Indier haben keine historische Ansicht und sind derselben gar nicht fähig und dies ist zur Vollendung des Gemäldes derselben charakteristisch. Was im alten Testament von den ⁽²⁴⁴⁾ Altvätern erzählt wird, können die Indier gar nicht auffassen, es vor-schweben ihnen alle Gegenstände zum maßlosen übergroßen. Unwahrscheinlichkeit Unmöglichkeit ist bei ihnen nicht vorhanden.</i></p> <p><i>Die Geschichte ist ein notwendiges Vermittlungsglied in der Bildung eines Volks, es muß ihm seine Vergangenheit geschichtlich vor Augen stehen,</i></p> <p style="text-align: center;"><i>daran hat es etwas Festes,</i> etwas,</p> <p>wodurch die Willkühr aufgehoben</p> <p style="text-align: right;"><i>und poli-tische Verfassung begründet und weiter fortgeführt wird.</i></p> <p style="text-align: center;">Eben weil sie keine historia haben, haben die Indier keine wahrhafte Geschichte.</p> <p style="text-align: center;">Was die großen Zahlen</p> <p style="text-align: right;"><i>der Perioden ihrer Geschichte anbetrifft,</i></p> | <p><u>インド人は、歴史的な見方をしないし、そのような見方をすることができない。そして、このことは、インド人についての絵を完成するには特徴的である。旧約聖書で祖先について物語っていることを、インド人は受け取り理解することがまったくできない。インド人にとっては、あらゆる対象が節度もなく途方もないものとして思い浮かべられる。インド人のところでは、真実とは思えないことや不可能なことが現前しない。</u></p> <p><u>歴史は、人民の教養形成における必然的な媒介項である。</u></p> <p>人民の過去は、歴史的に人民の眼前になければならない。</p> <p>人民は、<u>そこになにか固定したものを持っており、</u> <u>恣意を廃棄するなにかを持っており、</u></p> <p><u>政治的な体制を基礎づけてさらに持続させるなにかを持っている。</u></p> <p>インド人は、〔出来事としての〕歴史を持たないのだから、まさにそれゆえに真実の歴史を持たない。</p> <p>インド人がいう歴史上の期間をなす大きな数に<u>関して</u>いえば、</p> |

は、完全に恣意的で、歴史的な重要性がまったくないものである。

[3] たとえば、ある王は7万年統治したし、あるいは、ほかの君主は、1万年も贖罪に服した⁽²³⁾。

[4] この話で〔出来事としての〕歴史を考えることはできない、とみられる。

[5] 同様のことは、年代の数にも関わる。[6] こうした大きな数には、天文学的な感性があるが、インド人が古くから観察をして数が大きくなったかのような感性はない。

■ [3] [1] 簡単な表象を与えるために、我々の暦年とインド人の数え方を比較してみよう。

[2] 我々の場合、1年は365日と数時間で計算するので、この数を、精確に表現するため、日や時などといった特定の単位と関係させて用い、そうした〈比〉を分数で表現する。

[3] しかし、この計算の精確な表現を分数でしなければ⁽²⁴⁾、その数は、より詳細に規定されればされるほど、よりいっそう大きくなってしまふ。[4] さて、我々がいう1年間に、月は、12回地球の周囲を運行し終えて、なお余りがある。

[5] だが、もう一つ、19年に237回も月が回るメトン周期の暦法があり、そのため、我々の19年後には、月が同じ位置で再び見出される。

[6] そこで、インド人は、地球から見えるすべての惑星⁽²⁵⁾が一点(一列)に並ぶ⁽²⁶⁾のがいつになるか告げようと試み⁽²⁷⁾、こうした〈関わり方〉を比較する大きな数によって分数を表現する。

[7] このため、インド人の場合、とても大きな数が生じてしまふ。[8] インド人はさまざまな天文学システム⁽²⁸⁾を持

aber diese Zahlen sind vollkommen⁽²⁹⁾ willkürlich, ganz ohne historische Wichtigkeit. [3] Ein König hat z. B. 70000 Jahre regiert, oder ein anderer Fürst hat sich Büßungen von 10000 Jahren unterworfen. [4] *Man sieht, daß an Historie dabei nicht zu denken ist.*

[5] *Ebenso verhält es sich mit den Zahlen der Zeitrechnung.* [6] Diese großen Zahlen haben *einen* astronomischen Sinn, aber den Sinn nicht, *als ob die Inder* so alte Beobachtungen hätten, *daß die Zahlen* so groß *[geworden]* wären.

■ [3] [1] *Um eine kurze Vorstellung zu geben, wollen wir unser Jahr mit den indischen Zahlen vergleichen.*

[2] Wenn wir bei uns das Jahr auf 365 Tage und einige Stunden berechnen, so *gebrauchen* wir, *um* solche Zahlen *genau auszudrücken, sie* in Beziehung auf eine bestimmte Einheit, *zum Tag, zur Stunde etc.,* und drücken solche Verhältnisse mit Brüchen aus.

[3] Wenn man dies aber nicht mit Brüchen tut, so werden *die Zahlen* je bestimmter, *desto*⁽³⁰⁾ größer. [4] So vollendet der Mond seinen Umlauf um die Erde in einem *von unseren* Jahren zwölf Mal *mit einem Überschuß.*

[5] Nun gibt es aber die metonische Methode, wonach er in 19 Jahren 237 Umläufe gemacht *[hat], so daß nach 19 unserer Jahre der Mond an derselben Stelle sich wieder befindet.* [6] So haben die Inder anzugeben versucht, wann alle Planeten, von der Erde aus gesehen, in einem Punkt beisammen ⁽²¹³⁾ gewesen wären, *und drücken die Brüche durch große Zahlen aus, wodurch solche Verhältnisse verglichen werden sollen.* [7] *So sind bei ihnen* so große Zahlen entstanden. [8] *Die Inder* haben verschiedene astronomische Sys-

| | |
|---|---|
| <p>so sind diese <i>ganz</i> vollkommen willkürlich, ein König hat zum Beispiel 70000 Jahre regiert, oder ein anderer Fürst hat sich Büßungen von 10,000 Jahren unteworffen.</p> <p><i>Andere</i> dieser großen Zahlen haben astronomischen ⁽²⁴⁵⁾Sinn, aber nicht den, <i>daß sie</i> so alte Beobachtungen hätten, <i>wodurch</i> so große Zahlen <i>bestimmt worden</i> wären.</p> <p>Wenn wir bei uns das Jahr auf 365 Tage und einige Stunden berechnen so <i>bedienen</i> wir <i>uns</i> solcher Zahlen in Beziehung auf eine bestimmte Einheit und drücken solche Verhältnisse mit Brüchen aus, wenn man dies aber nicht mit Brüchen thut, so werden <i>diese</i> Zahlen je bestimmter <i>je</i> größer, so vollendet der Mond seinen Umlauf um die Erde in einem Jahre 12 mal, nun giebt es aber die metonische Methode wonach er in 19 Jahren 237 Umläufe gemacht.</p> <p>So haben die Indier anzugeben versucht, wann alle Planeten von der Erde aus gesehen in einem Punkte beisamen gewesen wären,</p> <p><i>wo denn</i> große Zahlen entstehen. <i>Sie</i> haben verschiedene astronomische Sys-</p> | <p>この数は、<u>まったく完全に恣意的</u>であり、 たとえば、ある王は7万年統治したし、あるいは、ほかの君主は、1万年も贖罪に服した。</p> <p>こうした大きい数でも別のものは、天文学的な感性があるが、インド人が<u>そうした大きな数を規定する</u>ような古くからの観察をしているといった感性はない。</p> <p>我々の場合、1年は365日と数時間で計算するので、 この数を、特定の単位と関係させて<u>使い</u>、 そうした数の〈比〉を分数で表現する。</p> <p>しかし、この計算の精確な表現を分数でしなければ、その数は、より詳細に規定されればされるほど、よりいっそう大きくなってしまふ。さて、我々がいう1年間に、月は、12回地球の周囲を運行し終える。 だが、もう一つ、19年に237回も月が回るメトン周期の暦法がある。</p> <p>そこで、インド人は、地球から見えるすべての惑星が一点（一列）に並ぶのがいつになるか告げようと試みる。</p> <p><u>だから、この一列となる</u>ところで、大きな数が生じてしまふ。インド人はさまざまな天文学システムを持っており、<u>多かれ</u></p> |
|---|---|

っており、その正しさは、計算者の精確さに依存する。

[9] 核心は、こうした数が歴史的なものではなく天文学的な意味を有していること、[インド人は] 分数によってではなく大きな数全体によって精確なところを表現することである。

[10] さらに目につくことは、インドの歴史の最良の史料源泉が、インド人自身ではなく、ギリシア人やムスリムのものだ、ということである。

[11] ギリシア人による報告は、インド人がペルシア人に服従させられていることを考えると、重要なものではない。

[12] アレキサンダー大王が征服したのは一部にすぎず、ガンジス川までは進出することがなく、パンジャブまで進出したにすぎない⁽³¹⁾。[13] また、続くギリシアの諸王は、インドの占有を有していた。[14] セレウコス朝は、バクトリア国を支配下においた。

[15] イスラムの君主、すなわち、ガズニ人、つまりガズニを支配地としたアフガニスタン人がインドの玉座を我がものとする物語は、精確には、西暦1000年になってはじめてのことである。

[16] その後ティムールとその後継者がインドを征服し、ムガル帝国の基を開いた。しかし、これらのムガールの君主も、同様に没落して、ヨーロッパ人が最終的におおよそ国全体を我がものとした。

■ [4] [1] 歴史の史料源泉としてより重要なのは、インド国内のドキュメント、すなわち石碑や銅板などに刻まれた碑文である。これは、一部では、とても古い字体になっている。この字体は、サンクリットのものに似ており、一定の日付を与えてくれるが、そこの一定の記念碑の日付を与えてくれるにすぎな

teme, deren Richtigkeit von der Genauigkeit der Berechner abhängt.

[9] Die Hauptsache ist, daß solche Zahlen nichts Historisches sind, sondern astronomische Bedeutung haben und [daß die Inder] das Genaue nicht durch Brüche, sondern durch große ganze Zahlen ausdrücken.

[10] Ein ferner Bemerkbares ist, daß die besten Quellen indischer Geschichte nicht die Inder selbst, sondern die Griechen und Muslim sind.

[11] Die griechischen Nachrichten sind unbedeutend, daß die Inder den Persern unterworfen worden seien.

[12] Alexander eroberte nur einen Teil, drang bis zum Ganges nicht, sondern nur bis in das Pandschab [vor].

[13] Auch folgende griechische Könige hatten Besitzungen von Indien inne.

[14] Die Seleukiden haben die baktrischen Reiche unter ihrer Herrschaft gehabt.

[15] Genauer wird die Erzählung erst 1000 Jahre n. Chr., als islamische Fürsten sich der indischen Throne bemächtigten; Ghaznaviden, Afghanen, deren Herrschaft in Ghazni ihren Sitz hatte.

[16] Später haben Timur und dessen Nachkommen Indien erobert, ein mongolisches Reich gegründet; aber sich verweichlichend sind diese Mongolenfürsten ebenfalls untergegangen, bis die Europäer sich zuletzt des ganzen Reichs fast bemächtigt haben.

■ [4] [1] Wichtiger sind die Dokumente des indischen Inlands [als] eine Quelle der Geschichte, die Inschriften auf Steindenkmälern, Kupferplatten usw., die zum Teil in sehr alten Schriftzügen sind, welche dem⁽³²⁾ Sanskrit ähnlich [sind und] bestimmte Daten geben, aber nur Daten dieser

| | |
|---|---|
| <p>teme <i>nach den mehr oder weniger</i> <small>(246)</small> <i>genauen Beobachtungen.</i></p> <p>■ [2] Ferner ist die besten Quellen <i>der</i> indischen Geschichte <i>theils</i> die Griechen <i>theils die Mohamedaner.</i></p> <p>Alexander <i>ist</i> nicht bis zum Ganges <i>gekommen</i> sondern nur bis in das Pantschap,</p> <p>die Seleuciden haben die baktrischen Reiche unter ihrer Herrschaft gehabt, <i>aber gewißer</i> wird <i>die Geschichte</i> erst 1000 Jahr nach Christo <i>wo die Muhamedanen sie befreyt haben,</i> Gasenmieten, Afghanen, deren Herrschaft in Gasna ihren Sitz hatte.</p> <p><i>Nach Timur kamen dann die vortrefflichsten Fürsten, die aber nach und nach in Möglichkeit, versanken,</i></p> <p>bis die Europäer <i>nach Indier kommen.</i></p> <p>Ferner sind eine Quelle der Geschichte die Inschriften auf Steindenkmählern, Kupferplatten u. s. w. die zum Theil in sehr alten Schriftzügen sind, welche der Sanskrit ähnlich,</p> | <p><u>少なかれ精確な観察によつてゐる。</u></p> <p>さらに、インドの歴史の最良の史料源泉は、ギリシア人であつたり、<u>イスラム教徒のものであつたりする。</u></p> <p>アレキサンダー大王は、ガンジス川まで<u>到達せず、パンジャブまで到達したにすぎない。</u></p> <p>セレウコス朝は、バクトリア国を支配下においた。 <u>しかし、イスラム教徒、すなわち、ガズニ人、つまりガズニを支配地としたアフガニスタン人がバクトリア国を解放する歴史は、より確かなところでは、西暦1000年になつてはじめてのことである。</u></p> <p><u>そして、ティムールの後にもっとも卓越した君主たちがやつてきたが、この君主たちは、ヨーロッパ人がインドに来るまでは、しだいに没落した可能性がある。</u></p> <p>さらに、歴史の史料源泉は、石碑や銅板などに刻まれた碑文である。</p> <p>これは、一部では、とても古い字体になつてゐる。この字体は、サンスクリットのものに似てゐる。</p> |
|---|---|

い⁽³³⁾。[2] そのほか、土着の資料源泉として、王の一覧表といった収集がある⁽³⁴⁾。

[3] とくにウィルフォード大尉⁽³⁵⁾はこうした一覧表を収集し研究して、このうちいくつかは著名になった。

[4] この一覧表は、インドでは多かれ少なかれ信じられているが、そうした一覧表を所有しているウィルフォードの証言によると、それ自身品物ごとにそれぞれがかなり食い違っている。

[5] イギリス人は、近年、一覧表の収集と研究の点でとても尽力している。

[6] プトレマイオスの記述は、地理の記述としては精確なものだとみなされている。[7] ガンジス川の一地方であるアラハバードや他の多くの[地方]もプトレマイオスにとってすでに周知のことであった。

■ [5] [1] ところで、諸王の一覧表は、たがいに極端なほど矛盾している。

[2] 諸王の一覧表に関して、バラモンたちは、時期を一方では天文学的に、他方では歴史的にアレンジし固定することが最も重要であると振舞っている。

[3] バラモンは、こうした時期からなる空白をしばしば想像された諸王の名前で埋めていく。

[4] バラモンは、重要な王たちを省略し、その王たちの統治した年代を他の王のものに帰し、偏見や取り違えから、王たちや王朝をまったく別の時代に移していく。

[5] バラモンが中間を省略してある年代からすると遠い祖先を末裔に移してしまうことは、珍しいことではない⁽³⁶⁾。

[6] だから、これらの王について記述されていることは、徹頭徹尾神話的である。[7] これらの報告は、ウィルフォードがしてくれたものである。[8] ウィルフォードが物語るには、インドの歴史編纂者が彼に次のように打ち明けたとい

bestimmten Denkmale. [2] Außerdem ist eine einheimische Quelle die Sammlung der Listen der Könige.

[3] *Besonders der Kapitän Wilford hat diese Listen gesammelt und studiert, von de-nen einige im größten Ansehen stehen. [4] Aber diese Listen, die selbst mehr oder weniger Glauben in Indien finden, weichen nach Wilfords Zeugnis, der selbst eine solche besessen [hat], selbst in ihren Exemplaren sehr voneinander ab. [5] Die Engländer haben in neuerer Zeit sich viel darum bemüht.*

[6] *Als geographische Angabe werden als genaue die des Ptolemaeus gefunden. [7] Ihm waren Alahabad, eine Gegend des Ganges, sowie viele andere [Gegenden] schon bekannt.*

■ [5] [1] *Die Listen der Könige nun stehen im höchsten Widerspruch gegeneinander. [2] Die Brahmanen verfahren in Betreff auf sie so, daß ihnen am wichtigsten ist, Epochen teils astronomisch, teils geschichtlich zu arrangieren und festzusetzen. [3] Diese Räume füllen sie aus mit Namen von Königen, die oft eingebildet sind.*

[4] *[Sie] lassen wichtige Könige aus und schreiben ihre Regierungsjahre anderen zu, versetzen Könige und Dynastien aus Vorurteil oder Verwechslung in eine ganz andere Zeit.*

[5] *Nicht ungewöhnlich ist es, daß sie von einem Jahre entfernten Vorfahren zum letzten Abkömmling übergehen, die mittleren weglassend. [6] Was von diesen Königen dann angegeben wird, ist durchaus mythologisch. [7] Diese Nachrichten gibt uns Wilford. [8] Er erzählt, ein indischer Geschichtsschreiber habe ihm mitgeteilt, daß er*

| | |
|--|---|
| <p style="text-align: right;"><i>ferner</i></p> <p>⁽²⁴⁷⁾ die <i>vielen</i> Listen von Königen. Kapitän Wilford hat diese studiert, von denen einige im größten Ansehen stehen, nach Wilfords Zeugniß der selbst eine solche besessen weichen <i>sie aber</i> sehr von einander ab. <i>Wilford sagt es ist dabei nur Hauptsache gewesen, gewisse Zahlen von Epochen zu bestimmen</i></p> <p style="text-align: right;"><i>die dann so ausgefüllt werden, daß vielleicht nicht ein König wirklich gelebt hat und die größte Willkürlichkeit beobachtet wird indem sie oft einen König</i></p> <p style="text-align: center;">in eine ganz andere Zeit versetzen.</p> <p style="text-align: right;">Was von diesen Königen dann angegeben wird ist durchaus mythologisch.</p> | <p><u>さらに、王の一覧表がたくさんある。</u></p> <p>ウィルフォード大尉はこうした一覧表を研究して、このうちいくつかは著名になった。</p> <p>しかし、そうした一覧表を所有しているウィルフォードの証言によると、それ自身品物ごとにそれぞれがかなり食い違っている。<u>ウィルフォードが言うには、一定の数の期間を規定することだけがそのさいの核心であった。</u></p> <p><u>そして、この期間が埋められるのだが、ある王は、おそらく現実には生きていなかったし、ある王をまったく別の時代に移すことによって最大級の恣意性が観察される。</u></p> <p>だから、これらの王について記述されていることは、徹頭徹尾神話的である。</p> |
|--|---|

う。「自分は、まったくアバウトに、空白を名前で埋めていき、国々を一つにまとめる。自分の先輩たちの年代記編纂者が同じようにしてきたのだから、そうするのはまったく正当だ」と。

■【6】[1] 他のいかがわしい附帯状況も、インドの歴史〔理解〕を混乱させることに加担した。すなわち、その附帯状況とは、インド人が、さらに、疎遠な諸民族の歴史をもみずからの歴史のなかに移植することである。[2] 先ほどの一覧表では、「武勇の太陽」が頻繁に現われる。「武勇の太陽」は、計算によると、約紀元前50年に生きていたと思われる⁽³⁷⁾。[3] これが誰であったのかは、不確かなこときわまっている。[4] イギリス人がいっそう精確に調査したように、こうした有名な名前のうち9名を突き止めて、ある者は小国の王であったり、他の者はインド全体の王であったりしたことがわかった⁽³⁸⁾。[5] そのうち一人については、次のような物語りがある。すなわち、その王は、長い生命(長寿)を獲得するために、大きな犠牲を捧げた、と。[6] 前代未聞なことに、その王は自殺しようとしたのだが、そのさい、神像⁽³⁹⁾がその王に千年もの揺るがぬ支配を約束したというのである。[7] そして、処女と大工の間に息子が生まれたとされ、この息子は、その「武勇の太陽」を退位させた。[8] この息子は、明らかにキリストである。このように、キリストが行ったことは、インド風にアレンジされてインドの歴史に見出されるのである。

■【7】[1] 聖書外典書がまったくインド的に歪曲されたり、タルムードの書が同様に扱われたりするのが見出せる。[2] 同様に、ソロモンの歴史も、またムスリムやほかのイスラムの諸王の歴史も、インドの歴史に組み入れられるのが見出せる。[3] ムハンマドの詳細な歴史が物語られ、しかもムハンマドがインドで生まれ

ganz nach ungefähr die Räume mit Namen ausfülle, Reiche zusammenzöge und deshalb dazu berechtigt [sei], weil seine Vorfahren, die Chronikenschreiber, es ebenso gemacht haben.

■【6】[1] Ein anderer *merkwürdiger* Umstand⁽⁴⁰⁾, der zur Verwirrung der indischen Geschichte beiträgt, ist *noch*, daß *die Inder auch* die Geschichten fremder Völker in *ihre Geschichte* hineinbauen. [2] Am meisten kommt in jenen Listen *Wikramaditya* vor, der nach Berechnung *ungefähr* 50 Jahre vor Christus gelebt haben kann. [3] *Wer dieser gewesen sei, ist höchst ungewiß*. [4] *Wie die Engländer genauer nach-*⁽²¹⁵⁾*forschten, fanden sie, neun dieser berühmten Namen ausmittelnd, daß es ein König einmal*⁽⁴¹⁾*eines kleinen Reichs, einmal ganz Indiens gewesen sei*. [5] *Von einem wird erzählt, er habe ein großes Opfer dargebracht, um ein langes Leben zu erhalten*. [6] *Nicht erhört, habe er sich selbst töten wollen, [und] da habe die Gottheit ihm 1000 Jahre ungetrübte Herrschaft versprochen*. [7] *Da sei ein Sohn einer Jungfrau und eines Zimmermanns geboren, dieser habe den Wikramaditya entthront*. [8] *Dieses Kind ist offenbar Christus; denn das, was Christus getan hat, findet sich in dieser Geschichte auf indische Weise verarbeitet*.

■【7】[1] Es findet sich, daß die apokryphischen Bücher ganz indisch verzerrt sind, ebenso talmudistische Schriften. [2] *Ebenso findet sich auch die Geschichte Salomos in die indische verflochten, und auch die [der] Muslim und anderer islamischer Könige*. [3] *Die nähere Geschichte Mohameds wird erzählt und zwar so, daß er*

| | |
|--|---|
| <p>Ein anderer Umstand der zur Verwirrung der indischen Geschichte beiträgt ist, daß <i>sie</i> die Geschichte fremder Völker in <i>die ihrige</i> hinein bauen. Am meisten ⁽²⁴⁸⁾ kommt in jenen Listen <i>der Grammatidia</i> vor der nach Berechnungen etwa 50 Jahre v. C. gelebt haben kann.</p> <p><i>Solche Gramatidiai werden viere an anderen Orten auch</i> <i>neune erwähnt.</i></p> <p><i>einer davon soll die Gottheit den Kopf haben abschneiden wollen, durch Versprechung eines Tausendjährigen Reiches sei es davom verscheiden worden, worauf ein Kind von einer Jungfrau geboren sei u.s.w.</i></p> <p>Es findet sich daß die apokryphischen Bücher ganz indisch verzerrt sind, eben so talmudistische Schriften <i>rabbinsche Erzählungen von Salomo u. s. w.</i></p> <p>Mohamed <i>soll auch</i></p> | <p>他の附帯状況も、インドの歴史〔理解〕を混乱させることに加担した。すなわち、その附帯状況とは、インド人が、疎遠な諸民族の歴史をもみずからの歴史のなかに移植することである。</p> <p>先ほどの一覧表では、「武勇の太陽」が頻繁に現われる。「武勇の太陽」は、計算によると、約紀元前 50 年に生きていたと思われる。</p> <p><u>そうした「武勇の太陽」は、4 名であるが、別の場所で 9 名も言及されている。</u></p> <p>そのうちの一人については、<u>千年王国を約束する代わりに、神像がその頭を切ろうとした、とされている。</u></p> <p><u>そのあとに処女の子どもが生まれたとされる、などなど。</u></p> <p>聖書外典書がまったくインド的に歪曲されたり、タルムードの書が同様に扱われたりするのが見出せる。<u>ソロモンについてのラビの話などもそうである。</u></p> <p>ムハンマドもインドで生まれたとされている。</p> |
|--|---|

たとされている。[4] そして、ムハンマドがどのようにしてアラビアにたどり着いたかの歴史は、物語ることのできないほどとても恥ずかしく汚いものになっている⁽⁴²⁾。[5] とくに、ノアとその三人の息子の話もインドの歴史で出会うことにもなるが、やはりその息子の名前が間違えようのないものになっているほどである。

[6] インドの歴史は、このようなことのつながりのなかにある。

[7] ベントリは、もっとも厳密に調査を遂行したが、以上のような「武勇の太陽」が出てきうるのは紀元11世紀ないし12世紀になって初めてのことだと思いつく⁽⁴³⁾。

■ [8] [1] 天文学書に注目してコメントすべきことは、天文学書は、椰子の葉に書きつけられているため、長くは持たないということである。それゆえ、古い写本がなく、書き写さなければならない。その際に目に付くことは、書き写す人が恣意的に改変することを恥じなかったということである。

[2] したがって、[書写に] 留意しても最高に不確実なことが支配的である。

in Indien geboren sei. [4] *Die Geschichte, wie er dann nach Arabien gekommen sein soll, ist von der schändlichsten Schmutzigkeit, [so] daß sie nicht zu erzählen ist. [5] Besonders auch die Geschichten Noahs und seiner drei Söhne kommen auch in der indischen [Geschichte] vor, so daß noch die Namen der Söhne unverkennbar sind. [6] In solchem Zusammenhang befindet sich die indische Geschichte. [7] Bentley, der die genauesten Untersuchungen aufstellte, meint, dieser Wikramaditya könne erst in das elfte oder zwölfte Jahrhundert n. Chr. fallen.*

■ [8] [1] *In Ansehung der astronomischen Schriften ist zu bemerken, daß [sie,] indem sie auf Palmenblätter geschrieben sind, nicht lang halten, weshalb es keine alten Codices gibt, sondern [sie] müssen umgeschrieben werden, wobei sich gefunden hat, daß [sic] die Abschreiber der willkürlichsten Abänderungen nicht schämten. [2] So herrscht auch in der Rücksicht die höchste Unsicherheit.*

3 イルティング版でのテキスト集積の問題点——違う理解の合いの子

講義録の全体からするときわめて小範囲ではあるが、イルティング版が行ったノートの集積によりテキストが相当に膨らんだ結果を、前節で示した対比で一目にして了解することができる。第1節で言及したように、イルティング版は三つのノートを集積している。編纂者の評価によると、ホトーのノートは、その筆記状態からみて講義時間中に記された「口述筆記 (Mitschrift)」とみられ、「哲学的な思考の歩み

を再現する点でグリースハイムのノートよりも正確で包括的」であるとされるのに対し、グリースハイムのノートは、ヘーゲルの講義の「清書稿 (Ausarbeitung)」とみられ、「哲学的に理解の難しい文言のところでヘーゲルが仕上げた含蓄のある表現を適切に再現していない」とされる (Ilting, 526)。イルティング版は、主要にはこの二つを合体したものとなっており、先の対比では、グリースハイム・ノートをそのまま採

| | |
|--|---|
| <p>in Indien gebohren sein <i>und ihr</i> Geschichte wie er dann nach Arabien gekommen sein soll ist so schmutzig, daß sie nicht zu erzählen ist.</p> <p>Bentley <i>hat</i> die genauesten Untersuchungen aufgestellt <i>und gefunden</i> daß Gramatidia ⁽²⁴⁹⁾höchsten in das Elfte oder Zwölfte Jahrhundert n. Ch. fallen könne.</p> <p><i>Bei dem</i> Umschreiben <i>der</i> nicht lange haltenden Palmbblätter <i>erlauben sich</i></p> <p>die Abschreiber die <i>größten</i> Willkürlichkeiten.</p> | <p>そして、ムハンマドがどのようにしてアラビアにたどり着いたかの歴史は、物語ることのできないほど汚いものになっている。</p> <p>ベントリは、もっとも厳密に調査を遂行したが、「武勇の太陽」が出てきうるのもっとも遡っても紀元 11 世紀ないし 12 世紀だということを見出した。</p> <p>長くは持たない椰子の葉に書き付けられているため、</p> <p>書き写す人に<u>最大限の恣意を許している</u>。</p> |
|--|---|

用している部分も相当見られ、またそれ以外のところにも重複してグリースハイム・ノートと基本的に同趣旨の表現が散見される。ホトー・ノートの記述を斥けてグリースハイム・ノートの記述を選択した部分もあろうが、双方の記述をとともに採用したということも考えられる。イルティング版を見てそこにある類似の表現のなかにヘーゲルの思考の段階的な深まりなり広がりなりがあると考えると、足をすくわれかねない。たんに、並べられたテキストの違いにすぎない、ということがありうるからである。

そうした外形上の問題はともかく、集積されたテキストで問題としなければならない点を、前節で示した対比のかぎりできいづか指摘しておく。

まず、一般的なことだが、集積すべき箇所が適切であるのかどうか、疑問なしとしない、という部分がある。すなわち、イルティング版【4】[6][7]の「プトレマイオスの記述」云々の箇所は、前後にある「諸王の一覧表」の話と著しくかけ離れていることを確認されたい。これは、グリースハイム・ノートに存在しないもの

【図1】 グリースハイム・ノート第1巻245頁

245

Die, welche nicht ein, sondern ein
Erbknechtung zu stellen, werden sie groß die
Zustand englischer werden können. Wenn
wir bei uns die Tische auf, 265 Tische
und einige andere Einrichtungen so bestanden
in uns selbst zu stellen in England auf
uns selbst zu stellen. Einige sind werden
so sehr die Veränderung mit Leuten sind, wenn
man sich nicht auf die Tische auf, so
werden diese Tische zu bestanden zu
geben, so vollkommen die Tische zu
bestanden in den Tischen in einem Tische 12
mit, wenn nicht die Tische ein wichtiger Tische.
die Tische in 19 Tische 237 Tische
geben. Die Tische in Tische zu geben
zu geben, wenn nicht die Tische von den Tische
und Tische in einem Tische bestanden
werden können, so einen Tische zu geben,
nicht Tische. Die Tische zu geben
wenn die Tische zu geben die Tische

で、「口述筆記」であるとされるホトー・ノートにおいて——さらに「監査テキスト」とされたケーラー・ノートにおいても同様に——順序としてこの位置にあるものだとすれば、ヘーゲルが脱線したことよるとしか考えようがないが、唯一思いつくこととしては〈インドの天文学〉の由来を考えるなかでギリシアないしメソポタミアの知識との関連にヘーゲルが言及したのかもしれない。だとしても、イルティング版では、文脈を切断しているといわざるをえないだろう。もし、これが、ケーラー・ノートにのみ由来して順序としてもずれているのだとすれば、集積過程においてなんらかの錯誤が生じている可能性がある。

また、段落の区切りについても、イルティング版は、文脈を破壊する区分や併合をしているところがある。すなわち、グリースハイム・ノートを基準に考えたとき、その【1】段落に対応するのは、イルティング版の【1】～【3】【9】となるが、イルティング版の【2】でいったん区分するのは、前方【1】が歴史の有無に関していわれ、後方【2】が「大きい数」についていわれる点で、妥当なところかもしれないが、イルティング版【3】【10】以降は、インドの歴史に関する別途の史料源泉論となっており、内容的にいてそれ以前の議論とまったく異質なものになっている。すなわち、イルティング版でもその【3】【10】から改段すべきであるにもかかわらず、そのように措置されないことにより、前方の〈インドの天文学〉と後方の「王の一覧表」とが話として併合され、これらを同一文脈で考えることが強いられることになり、ヘーゲルのいう趣旨がとらえにくくなっている。いや、

むしろ、グリースハイムが明確にとらえている議論の異質性を編纂者のほうが理解できず、あえてこの区別を抹消しているところに、ことの深刻さがあると思われる。

また、同様のことであるが、グリースハイム・ノートの【2】段落に対応するのは、イルティング版の【3】【10】から末尾までである。この段落で中心となるイルティング版【4】【2】から始まる「王の一覧表」に関する議論は、先ほど指摘した【4】【6】【7】の「プトレマイオスの記述」によって分断されているのが最たるものだが、さらに【6】【7】【8】と段落が変えられることにより、一連のものとして理解できなくなってしまっている。もちろん、【6】【1】以降は、インド人が「疎遠な諸民族の歴史」をみずからの歴史に取り込んでしまうことに焦点があてられるから、それ以前とは位相の異なる話しであるには違いない。しかしながら、【6】【2】でただちに「先ほどの一覧表」と言われるように、やはり話題の中心は、「王の一覧表」なのであり、このことは、少なくとも【7】末尾に至るまで維持される。さしあたり【6】での段落変えを容認するとしても、【6】【4】～【7】【2】の箇所が——註38で詳細指摘するように——ウィルフォードの議論を連続して祖述するものであることを考えると、【7】での段落変えは、これを分断するもので、まったくもって不当なものである。

こうした段落構成が、イルティングらの思いつきによるものでないとするれば、ホトー・ノートまたはケーラー・ノートに根拠があるであろうが、もしそうだとすれば、そのノート自身の構成に問題があると評価していかなければならないと思われる。

イルディング版は、それを収めた『講義選集』の趣旨からして試行版といえるわけだが、このように、同趣旨の表現の重複や、こうした文脈の乱れがみられるところからしても、再検討を要するものであろう。そして、その再検討の方向性は、複数のノートから一つの〈理念的に想定される内容〉を「文献学的な作業」と称して集積することではなく、一つ一つのノートの丁寧な翻刻を達成することではないか。さらに、これが、それぞれのテキストを対比するように組み上げられるならば、ノートのそれぞれを評価しながら、ヘーゲルが講義で語ろうとしたことを我々はかなり精確につかむことができるにちがいない。

あともう一点、本論のテーマである〈インドの天文学〉に直接関係する問題を指摘しなければならない。これは、講義の趣旨の受けとめが正反対の方向に行きかねない性格のものである。

すなわち、イルディング版【3】【8】では、インド人のもとの「天文学システム」の「正しさ」が「計算者の精確さに依存する」とされていて、場合によってはその「正しさ」が保証されない、という理解にも進みうるであろう。そして、このことから、インドの歴史記述で現われる「大きな数」の「いかがわしさ」が「天文学システム」のいかがわしさと同列であると受けとめることになるだろう。もっとも、ヘーゲルがインドの歴史も天文学もいかがわしいと主張する文脈だととらえれば、このことにはさしたる疑問も生じないと思われる。実際、筆者自身は、イルディング版を初見した時点で、このように理解していた。なお、本論「はじめに」で示したように、今日一般に読まれるヘーゲル

の『歴史哲学』では、インドの「天文学的な書類」において「星座に関する記述」が「往々矛盾してい」とされており、これは、そうした理解の延長線上にある。要するに、〈インドの天文学〉がいかがわしいとの理解は、ヘーゲルが講義した時点でもまた今日においても、もっともポピュラーでドミナントな理解だといえてよい。

しかしながら、このような理解は、まずイルディング版の内部においてすらただちに破綻してしまうのである。すなわち、イルディング版【2】【6】において、インド人のいう年代の「大きな数」は、「天文学的な感性」があるが、「観察をして数が大きくなったかのような感性はない」としていて、「天文学的な感性」には、観察によるものと、観察によらないものとの2種があることを区別している。その後【3】【1】以下、〈インドの天文学〉に関する言及があり、「惑星が一点（一列）に並ぶ」周期を考えるために「大きな数」が生じる、としている。もちろん、部分的には観察がなされており、そのうえで推論や計算により「大きな数」が生ずることになるだろう。だから、「大きな数」は、観察によるものだともいえれば、観察によらないものだともいえる。ただし、「大きな数」そのものが観察によらないものだと考えとしても、それは、あくまで「天文学的な感性」を規定している。だから、【3】【9】では、「大きな数」は、「歴史的なものではなく天文学的な意味を有している」としていて、年代の「大きな数」とは截然と区別されるわけである。しかも、天文学上の「大きな数」は、「精確なところを表現する」ためにある。つまり、インド人の「天文学システム」は、

いかがわしいものではなく、基本的に精確なものとして理解されている。これが〈インドの天文学〉のいかがわしさを破綻でなくてなんであろうか。

もちろん、こうしたテキスト理解の矛盾を自覚させる点で、イルティング版は大きな貢献をしたといってもよいだろう。少なくとも、ガンス版を嚆矢とする従来のヘーゲル『歴史哲学』では、この点に気づくことすらなかった⁽⁴⁴⁾。このさい、〈インドの天文学〉をめぐる理解についてイルティング版では矛盾をきたすことをつきつめて考えるならば、〈インドの天文学〉がどのようなものなのかという知識が必要になる。しかも、ヘーゲルは、[3] [1] ~ [9] にみられるように、〈インドの天文学〉について簡潔ながら言及しているわけだから、彼自身が〈インドの天文学〉に関する知識をある程度有していたと推察しうる。それが、講義という伝言ゲームのなかで、聴講者それぞれの理解レベルで情報が落ちたり歪曲されたりし、さらにその伝言の編纂のなかで、文献学的な感性を有する編纂者の理解レベルで同様のことが起こっている。なお、この箇所は、正確な理解をするためには、註釈をつけるべきところであろうが、イルティング版では、文献表にはそれらしきものを挙げてはいるものの⁽⁴⁵⁾、註そのものをつけるに至っていない。本論では、次節でこのことを若干試みるものである。

〈インドの天文学〉に関する理解は、聴講者のレベルですでに分裂していたと思われる。というのも、次のような事情が認められるからである。すなわち、〈インドの天文学〉の「正しさ」が「計算者の精確さに依存する」というイ

ルティング版 [3] [8] のテキストに対応するグリースハイム・ノートは、「インド人はさまざまな天文学システムを持っており、多かれ少なかれ精確な観察によっている」としている。したがって、イルティング版の当該テキストは、ホトーによるものである蓋然性が高い。このため、ホトー・ノート（イルティング版から推察されるそれ）は、〈インドの天文学〉のいかがわしさの方に理解が振れるとすれば、グリースハイム・ノートは、その精確さの方に振れるものだといってよいだろう。もちろん、グリースハイム・ノートのもとでも〈精確さ〉をより少なく見積もれば、〈インドの天文学〉の「正しさ」は、「計算者の精確さに依存」していかがわしい、という理解を正当化するかもしれない。しかし、グリースハイムの表現がそういう理解を導かないこともありうるところで、このように解すれば、[3] [9] でいわれる天文学上の「大きな数」が「精確なところを表現する」ためにあるとされることとも整合する。しかも、このように整合的に理解したときには、〈インドの天文学〉がいかがわしいのか否かといった矛盾をきたすことはないのである。

しかしながら、イルティング版は、グリースハイムの表現を素直に受けとめることなく、[3] [8] 冒頭をグリースハイム・ノートから採り、後半を別のノートから採るという、合の子を作る選択をあえて行った。このことは、「文献学」的にはテキストをより豊富化するという観点から正当化されるのかもしれないが、そのわずかの差に聴講者のなかで分裂した理解がみられるときに事実上一方を支持する結果ともなっている。編纂者がどのような判断でこの結果

を良しとしたのかは知るよしもないが、〈インドの天文学〉と「諸王の一覧表」とを編纂者が合体させたという先に指摘した事情にその秘密があるかもしれない。

すなわち、【5】[2]では、「諸王の一覧表」でいわれる「時期」を「アレンジ」するさいに、「天文学的」にも「歴史的」にもこれが行われるとされている。しかしながら、グリースハイム・ノートには、これに対応するテキストがない。また、【8】[1]では、「天文学書」への言及があり、書写に伴って「恣意的」な「改変」がなされるとされている。だが、グリースハイム・ノートには、書写の恣意性への言及はあっても、「天文学書」への言及がない。このいずれもが「諸王の一覧表」の取り扱いをめぐる文脈のもので、本来の意味での「天文学書」はここでは関係がないとみられる。「天文学」をそれ自体として

想起させる記述は——前後でヘーゲルが「天文学」にかかわる表現をとったかもしれないとしても——、グリースハイム以外の聴講者の聴き誤りと考える必要があるかもしれない。この予想にしたがいうるなら、あるノート——蓋然性が高いのはホトー・ノート——では、〈インドの天文学〉に関して系統的に誤った理解をしている可能性があり、しかも、そのノートを「口述筆記」として高く評価する編纂者がいたときには、〈インドの天文学〉に対する中立的な叙述は斥けられて、〈インドの天文学〉のいかわしさを導く表現に軍配が上がるかもしれない。おそらく、このような事情から、ガンス版以降、ヘーゲルは〈インドの天文学〉がいかわしいと講義している、との理解を定着させることになるのではなからうか。イルティング版は、この流れに掉さしていると思われる。

4 〈インドの天文学〉へのヘーゲルの言及を理解するために

本節では、イルティング版【3】段落の箇所を読み解くさいに必要な知見を確認しておきたい。

【1】では、「我々の暦年」と「インド人の数え方」を「比較」する、という主題が提示されている。「我々の暦年」は、ヘーゲル当時のドイツの暦年であり、カトリックでは、1582年にグレゴリオ暦が施行されたが、プロテスタントでは遅く、1770年にこれが受け入れられ、1775年に完全に採用される⁽⁴⁶⁾。これに対し、「インド人の数え方」は、太陰太陽暦である。

【2】では、グレゴリオ暦の場合、1年を日や時の単位を用いて、「分数 (Bruch)」表現している。周知の通り、天文学物理学的な太陽年

(回帰年)は、約 365.2422 日、すなわち約 365 日 5 時間 48 分 46 秒であるが、グレゴリオ暦による平均年は、約 365.2425 日、すなわち約 365 日 5 時間 49 分 12 秒である。ここで Bruch を通例にしたがって「分数」と訳すが、Bruch は、一定の単位をいくつかに分け、その分けられた部分の数を示すもので、分母と分子からなる⁽⁴⁷⁾。1 日を 24 に分けた 1 部分を 1 時間というのだから、「365 日 5 時間 49 分 12 秒」といった表現は、分母が表現されないもののこれを暗黙に前提としたいわば分子だけの分数表現である。なお、1 日 24 時間の代わりに、1 日を 60 等分する 60 進法の記述の仕方があり、プトレマイオ

スや〈インドの天文学〉では、これが用いられていたと指摘されている(矢野、36)⁽⁴⁸⁾。ベントリの論文——【7】【7】で言及があるようにヘーゲルがその論文を参照したことは明白である——でも、60進法の記述が基本である⁽⁴⁹⁾。

【3】では、「この計算の精確な表現を分数でしなければ、その数は、より詳細に規定されればされるほど、よりいっそう大きくなってしまふ」とする。これは、1年を365日でいったん締める考え方とは違ったインドの考え方を指摘している。インドでは、【2】で指摘したような分数表現を用いない。ここで言及されている大きな「数」は、結論的にいえば、「ユガ」のことである。これは、【6】にある「そこで、インド人は、地球から見えるすべての惑星が一点(一列)に並ぶのがいつになるか告げようと試み、こうした〈関わり方〉を比較する大きな数によって分数を表現する」との関連性がある。〈インドの天文学〉そのものには不案内の我々としては、さしあたりこのことに詳しい矢野道雄の研究を参照することが捷径だと思われる。

矢野道雄は、アールヤバタ(476年生)の記した『アールヤバティーヤ』(499年)を翻訳し、それに詳細な解説と註を付している⁽⁵⁰⁾。その第3章「時の計算」第8節には次のようにある。「神々の年の12,000倍が惑星全部〈が会合する〉ユガである。惑星のユガの1,008倍がブラフマーの1日である」(矢野、113)。このさい、同章第7節では、「1太陽年は人間の年である。その30倍は祖霊の年である。祖霊の年の12倍が神々の年である」(前掲箇所)とされているから、「神々の年」は「人間の年(太陽年)」にして $30 \times 12 = 360$ 年となる。したがって、「神々の

年の12,000倍」とは、「人間の年」にして、 $360 \text{年} \times 12,000 = 4,320,000 \text{年}$ ということになる。これが、「1ユガ(マハーユガ)」である(前掲箇所註144参照)。ベントリは、「Mahā Yuga, or 4320000」と記述している⁽⁵¹⁾。この「ユガ」の意味は、「惑星すべてが大会合をする(平均惑星の黄経がすべて等しくなる)周期のことである(前掲箇所註145参照)。これは、イルティンク版【3】【6】でいう「すべての惑星が一点(一列)に並ぶ」という言明と整合するだろう。この「一点」とは、黄経の同一点のことである。地球を中心とする同心円を描けば、惑星(太陽も含む)は一列に整列して見える。さらに、「ブラフマーの1日」は「1カルパ(劫)」とされ、 $4,320,000 \text{年} \times 1,008 = 4,354,560,000 \text{年}$ となる(前掲箇所註146参照)。これは、確かに「大きい数」であるには違いない。なお、「伝統的」な説では、「1カルパ」は、1,000ユガすなわち4,320,000,000年とされる(前掲箇所参照)。ベントリは、この考え方をブラフマグプタ(Brahmā Gupta)やバースカラ(Bhasker)の説、あるいはヴァラーハミヒラ(Varāha Mihira)の『スールヤ・シッターンタ(Suryā Siddhānta)』の説として紹介している⁽⁵²⁾。ヘーゲルはベントリを参照しているから、その知りえた「1カルパ」は1,000ユガのものであろう。

ところで、ヘーゲルのテキストで数の大小をあげつらう単位は、「日」であるから、インドの天文学において「1太陽年」が何日にあたるかを考える必要がある。これは容易に計算できる。『アールヤバティーヤ』第1章「十のギーティ詩節」第1節では、1ユガにおける惑星等の回転数が示されていて、「1ユガにおける太陽の

回転数は、4,320,000、月は、57,753,336、地球は東へ1,582,237,500」(矢野、89)とされている。このさい、〈太陽の1回転〉は1恒星年にあたりと考えられている(前掲箇所註8参照)。矢野の解説(矢野、36)にしたがって説明すれば、こうである。1ユガあたり地球は1,582,237,500だけ回転するが、その間に太陽は4,320,000だけ回転してしまうから、この分が控除されなければならない。ここで、「地球の回転数」から「太陽の回転数」を控除して得られる1ユガの日数1,577,917,500を「太陽の回転数」で割ると、「1太陽年」の長さを日数で表わすことができる。すなわち、「1太陽年」は、 $1,577,917,500 \text{ 日} \div 4,320,000 = 365.2586805 \text{ 日}$ となる。時間以下を60進法表記すると、「365; 15, 31, 15」日になる。ヘーゲルが参照しえたベントリは、『スールヤ・シッターンタ』による1年の長さを紹介し、これによれば、1年は“365 days 15^{do}. 31' 31" 24''' だとしている⁽⁵³⁾。

[4]では、月の周期への言及があり、太陰暦とのかかわりが考えられる。[3]が「日」を単位とした太陽年への言及であるとする、[4]は「月」を単位とした太陽年への言及である。

[5]でのメトン周期(metonic Methode)は、太陰太陽暦に関係し、19太陽年が235朔望月に等しい、とするもの。より詳しくは、1年を12ヶ月とすると、太陰暦での228ヶ月に7ヶ月の閏月を加えることで、月と季節の不一致を解消するものである。メトンは、紀元前432年にアテナイの暦としてこの方法を提案した人物で、この置閏法は、メトン周期として有名である⁽⁵⁴⁾。なお、ベントリの論文では、メトン周期への言及がない。ただし、ベントリは、み

ずからの論文でパイイの書『インドとオリエンの天文学について』に言及しており⁽⁵⁵⁾、このパイイの書では、メトン周期への言及がある⁽⁵⁶⁾。ただ、これにしたがうかぎり、イルティング版、ひいてはグリースハイム・ノートにいう「19年に237回も月が回るメトン周期」というのは不正確な表現であり、〈235回も月が回る〉うち〈7回は閏月〉であるという説明を聴き間違えた可能性が高い⁽⁵⁷⁾。

[6][7]については、すでに前述のところである。ただ、[6]の「大きな数によって分数を表現する」は、一つには、[3]でいう数が大きくなることと同様であり、一つには、[7]でいう「大きな数が生じてしまう」ことと同様であり、事柄を考える以前に、テキストの集積に問題があるのではないかと、思える箇所である。つまり、テキストとしては、違う事柄が指摘されているのではないかと、思ってしまう表現がなされているが、実は、「ユガ」ないし「カルパ」といった同じ事柄を指示していると思われるにもかかわらず、必ずしもそのように見通せないことがあるのは、問題であろう。

[8]でいうインドにおける「さまざまな天文学システム」については、なにを念頭に置くのかが問題になる。矢野の研究に依拠した場合、インドの天文学史は、まずは大括りに、①「ヴェーダ時代」、②「バビロニア要素の時代」、③「ギリシア・バビロニア要素並立の時代」、④「ギリシア要素の時代」、⑤「イスラム要素の時代」に区分されるが、「インド天文学の中心部分」をなすのは、④「ギリシア要素の時代」だとされる(矢野、22-25)。この「ギリシア要素の時代」には、「天文常数の違い」によって、1

「アールキヤ学派」、2「アールダラートリカ学派」、3「ブラーフマ学派」、4「サウラ学派」、5「ガーネシャ学派」があるとす (矢野、25)。ここで、「天文常数」とは、『アールヤパティーヤ』でいえば先に示した「十のギーティ詩節」に示されるもので、「ユガ」「カルパ」もそれに含まれる。この『アールヤパティーヤ』は「アールキヤ学派」に属し、この学派は西暦500年ごろから15世紀まで南インドで大きな勢力を持っていた、とされる (矢野、26)。

ベントリは、論文「スールヤ・シッダーンタという古文書について」のなかで、現在利用できる〈インドの天文学〉システムとして、天文常数である「カルパ」の違いによって次の三つを挙げる⁽⁵⁸⁾。

第1のシステムは、ブラフマグプタ (Brahma Gupta) の「カルパ」に依拠するもので、文献として、ブラフマグプタの著作 (『ブラーフマスプタ・シッダーンタ』(628年)であろう) とバースカラ (Bhasker) (二世であろう) の『シッダーンタ・シローマニ (Siddhanta, Serómoni)』(1150年) が指示されている。つまり、矢野の分類でいえば「ブラーフマ学派」のシステムである。

第2のシステムは、ヴァラーハミヒラの「カルパ」に依拠するもので、文献として、その『スールヤ・シッダーンタ (Súrya Siddhánta)』『ソーマ・シッダーンタ (Sóma Siddhánta)』『ヴァシシュタ・シッダーンタ (Vasishtha-Siddhánta)』が指示されている⁽⁵⁹⁾。ヴァラーハミヒラの『スールヤ・シッダーンタ』という指摘に素直にしたがえば、矢野の分類でいえば「アールダラートリカ学派」のシステムとなるはずだが、単純

ではない。というのも、先にも示したように、ベントリは、『スールヤ・シッダーンタ』にしたがっての1年の長さを“365 days 15^{do}. 31 / 31" 24'"^{'''}”としており、この値は、矢野によると「サウラ学派」のものだから (矢野、54)、ベントリは、「8～9世紀に成立した新しい『スールヤ・シッダーンタ』」(矢野、27)のことをヴァラーハミヒラの『五天文学書要綱』に含まれる『スールヤ・シッダーンタ』のことだと混同している可能性がある。もっとも、この学派は、「アールダラートリカ学派に最も近い」(矢野、28)とされるから、ベントリが生きた時代では、必ずしも厳密に区別されなかったのかもしれない。

第3のシステムは、この二つのカルパに依拠しないもので、ベントリの論文「インドの天文学体系について」を援用すれば、パドマナーバ (Sri Dhara Padma Nábha) の「カルパ」に依拠するもので⁽⁶⁰⁾、いくつかの書名が挙げられる⁽⁶¹⁾。これがどの学派に属するかは、浅学の我々としては不明である。

なお、ベントリによれば、『スールヤ・シッダーンタ』から計算される惑星の位置の誤差は、不正確な観察のせいではなく、天文学者が採用した「人為的なシステムの本性」から生ずるとして、紀元において惑星が一点に並ぶことの想定を指摘している⁽⁶²⁾。これにもとづけば、「ユガ」「カルパ」などのインドの天文常数に依拠していることが誤差の理由だと考えられるだろう。この論文を読んでいるヘーゲルは、ホトー・ノートのように「計算者の正確さ」といった主観的なところにインドの「天文学システム」の「正しさ」を求めることはないだろう。むしろ

ろ、誤差は、「天文学システム」それ自体に内在しているのである。そして、観察それ自体には問題がない、という認識に立てば、グリースハ

イム・ノートのように、「多かれ少なかれ精確な観察によっている」と講義することになるだろう。

おわりに——「世界史の哲学」における事実へのこだわり

ヘーゲルは、事実の世界を哲学の俎上に載せようとするとき、常識的な対応であるとはいえ、経験的な事実に関する〈情報知〉を最大限的確に収集しようと努める習癖がある。ここではいちいち指摘しないが、ヘーゲルが政論を組み立てるときの作法がことほど左様であることは、周知のことである。そして、このことは、「世界史の哲学」においても、歴史的な事実について同様である。ヘーゲルの経験主義は、こと事実に関して本質的なのである。

歴史的な事実に関する〈情報知〉が、経験以前の一般的な一般論としてヘーゲルが想定する『法の哲学』「世界史」論的な図式に合致するかどうかはともかく、ヘーゲル自身は、みずからの「世界史の哲学」の図式に事実のほうが合致する、という確信をもっていたと思う。したがって、ヘーゲルにとって、事実に関する〈情報知〉の精度は上がればあがるほどよく、よって情報収集にのめり込む、といった様子が、「世界史の哲学」の講義のあり方から窺われる。いや、もしかしたら、みずからの図式が事実によって崩壊しないかどうかといった不安や焦燥に駆られて、情報収集にのめり込んだ、というのが実相かもしれない。とりわけ、インドは、みずからが見知った世界といった感性的な経験をまったく超えた世界であって、みずからの感性はともかく、可能的な経験としてこれを再現できる

かどうかは、情報収集へのみずからの努力に依存するとはいっても、本質的にあなた任せであることは否めない。とはいえ、そのような限界があったとしても、情報収集に誠実にあつたヘーゲルの姿は、銘記されなければならないと思う。これは、「世界史の哲学」とどまらないヘーゲル哲学の根本的な性格にかかわる話したとは思いますが、主題ではないこの場では、その示唆にとどめておこう。

ところで、「世界史の哲学」として「インド」論をしようとするとき、時間（時代）の確定は根本問題である。それは、ヘーゲルの図式以前に、歴史学的に根本問題であろう。このさい、天文学は、時間として歴史を支える自然学的な基礎であって、その秩序が明確にならないかぎり、時間（時代）を語りえないし、当然ながら事象を「世界史」のうちに位置づけられない。本論冒頭「はじめに」において、〈インドの天文学〉を主題化することが「特殊で瑣末なことへのこだわり」と思われる危惧を表明しておいたが、実際にそう思われた向きは、残念ながら歴史を語る根本を——ヘーゲルのそれといわずそれ自体において——当座忘れてしまっていたわけである。

ヘーゲルは、情報収集をするとしても、それが時間（時代）の点でどのように評価すべきであるか、厳密に調べようとした。したがって、ヨ

ヨーロッパとは異なる時間秩序のなかに並べられる事実を考える以前に、その時間秩序そのものを考えざるをえなかったのだと思われる。これは、ヘーゲルだけの課題ではなく、それ以前に、オリエント学ないしアジア学にとっての根本問題であったであろう。であるがゆえに、〈インドの天文学〉に関する論考も当時の学会の重要な課題たりえたのである。

このさい、歴史を支える自然学的な基盤と、物語ないし記述としての歴史の方法——精神的な基盤——とを、ヘーゲルは意識的に区別しながら議論していたと思われる。

ヘーゲルが依拠したベントリによる〈インドの天文学〉に関する議論は、一方での自然学的な基盤のそれなりの現実性を保証している。本論で示したように、ヘーゲルは、みずからの講義においてこの点を歪曲して〈インドの天文学〉を見下すことがなかった。このことを確認しておくことは、とても重要なことである。というのも、ホトー・ノートの延長線上で、そもそも〈インドの天文学〉をいかがわしいとヘーゲルがみなしているとするならば、物語や記述以前にそもそも歴史を語りえないとせざるをえないからである。

もっとも、このように〈インドの天文学〉という歴史の自然学的な基盤についてはその妥当

性を認めるとしても、インドの歴史をめぐる問題の発生次元がもっぱら「精神」の次元にある、という確認をヘーゲルはしようとしていたのだと思われる⁽⁶³⁾。しかしながら、ヘーゲル哲学において、「自然」よりは「精神」のほうに優位があることはわかっているが、「自然」のもつ当然の位置づけがわからない、という解釈者がヘーゲルの講義やそのノートに出会うと、「自然」のレベルの評価と「精神」のレベルの評価を混同し、「精神」のレベルの評価を「自然」のレベルに押し付けることになるのかもしれない。かくして、ヘーゲルにおける〈インドの天文学〉は、ヘーゲルによるインドの「精神」観をもとに評価される運命にある。

ヘーゲルは、〈インドの天文学〉を、その紹介に接して相当程度に精確なものだと評価していたと思われる。その評価にさいして、みずから事柄を調べ、理解するかぎりのことを学生に伝えていると思われる。むしろ、インドにおいて問題なのは、「精神」が織りなす歴史的な事実のほうであって、これを確証する史料源泉が確保し難いことにヘーゲルが直面したことは事実であろう。こうした状況にあって、ヘーゲルがインドの「精神」を歴史的な観点でどのように把握したのか、このことが今後の課題となってくる。

* この論文は、科学研究費補助金（基盤研究 B）による研究「ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性」（課題番号 21320008、研究期間：2009～2011 年度）および跡見学園女子大学特別研究助成費による研究「ヘーゲル世界史哲学講義におけるインド論と Asiatic Researches をめぐる関係の研究」（研究期間：2009 年度）の成果の一部である。なお、本稿をなすにあたって、連繫研究者である久間泰賢氏（三重大学）に多大なご教示を受けた。ここに記して謝意を表します。

註

- (1) *Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, hrsg. v. D. Eduard Gans (*Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Werke*, Vollständige Ausgabe durch einen Verein von Freunden des Verewigten: D. Ph. Marheineke, D. J. Schulze, D. Ed. Gans, D. Lp. v. Henning, D. H. Hotho, D. K. Michelet, D. F. Förster, Bd. 9), Verlag von Duncker und Humblot, Berlin 1837 (abgek. *Gans*). このガンス版は、Google を通じ、バイエルン国立図書館提供の電子データで参照した。ガンスは、ヘーゲル自身の手になる講義草稿のほか、5回の講義のノートを使用した、としている。その筆記者は、シュルツェ (Schlze)、グリースハイム (Griesheim)、ホトー (Hotho)、ヴァーダー (Werder)、ハイマン (Heimann)、カール・ヘーゲル (Carl Hegel) だとされる。Vgl. Gans, „Vorrede“, in: *Gans*, S. XXf. ヘーゲル『歴史哲学』上巻、武市健人改訳、岩波書店、1954年(以下「武市訳」という)、13頁参照。
- (2) *Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, hrsg. v. Dr. Eduard Gans, Zweite Auflage besorgt von Dr. Karl Hegel, Verlag von Duncker und Humblot, Berlin 1840 (abgek. *Karl Hegel*). このカール・ヘーゲル版は、Google を通じ、インディアナ大学図書館提供の電子データで参照した。カール・ヘーゲルによると、ガンス版は、1830/31年の講義を再現しようとしたものとして位置づけられる。しかし、ズーアカンプ社版編集者によると、最後の1830/31年のノートは残っていないとみられている。Vgl. „Anmerkung der Redaktion zu Band 12“, in: G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 12, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Theorie Werkausgabe, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970 (abgek. *Suhrkamp*), S. 562. カール・ヘーゲルによるガンス版のそうした位置づけは、カール・ヘーゲル自身が「後の講義では、中国やインド、一般に東洋をより短く扱って、ゲルマンの世界に多くの時間を割いて注意を払っている」と言明することに照らしても、外形的に必ずしも信頼の置けるものではないであろう。Vgl. Karl Hegel, „Vorrede zur zweiten Auflage“, in: *Karl Hegel*, S. XXI. 武市訳、16頁参照。けだし、ガンス版でも、東洋の取り扱いが相当な分量になっているからである。もっとも、ガンスの序文にあるように、中世や近世の立ち入った取り扱いがあるのは1830/31年の講義だとされているから、この点で、その講義が参照されたとみてもよいのかもしれない。Vgl. Gans, „Vorrede“, in: *Gans*, S. XXI. 武市訳、14頁参照。また、カール・ヘーゲルは、「最初の講義にある本来的に哲学的なもの」を取り戻そうという意図があったであろうから、この点で、ガンス版が最後の講義に依拠しているといわざるをえなかったのかもしれない。
- (3) G. W. F. Hegel, *Sämtliche Werke*, Jubiläumsausgabe auf Grund des von L. Boumann [et al.] besorgten Originaldruckes im Faksimileverfahren, neu hrsg. von Hermann Glockner, Bd. 11, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Frommann-Holzboog, Stuttgart 1927.
- (4) ズーアカンプ社版は、カール・ヘーゲル版に依拠しつつ、ラッソン版とのかかわりで必要に応じヘーゲル自身の手稿により訂正している。Vgl. „Anmerkung der Redaktion zu Band 12“, in: *Suhrkamp*, S. 568.
- (5) Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*, vollständig neue Ausgabe von Georg Lasson, Philosophische Bibliothek, 4 Bde., 1. Bd., 31930; 2. Bd. - 4. Bd., 21923 (Unveränderter Abdruck 1944) (abgek. *Lasson*). ラッソン版は、ヘーゲル自身の手稿と講義ノート、さらに先行するガンス版とカール・ヘーゲル版に依拠してテキストを構成した。このさい参照された講義ノートは、1822/23年のグリースハイム・ノートとケーラー・ノート、1824/25年のケーラー・ノート、1826/27年のステイーヴ (F. Stieve) のノートである。Vgl. „Zur Herstellung des Textes“, in: *Lasson*, S. 288-297. ズーアカンプ社版編集者の評価では、ラッソンは、ガンスやカール・ヘーゲルほどに講義ノートを利用できなかったにもかかわらず、たまたま利用できるものを用いてテキストを改変し、ヘーゲルの手稿と矛盾をきたすに至っており、ラッソン版は、カール・ヘーゲル版よりも劣るとされる。Vgl. „Anmerkung der Redaktion zu Band 12“, in: *Suhrkamp*, S. 566f. なお、ホフマイスターは、ヘーゲルの自筆原稿とラッソンによる補足との区別を明示するかたちで講義の冒頭序論部分を編集しなおした。Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*, Erste Hälfte, Bd. I: *Die Vernunft in der Geschichte*, hrsg. v. J. Hoffmeister, Philosophische Bibliothek 174a, Felix Meiner, Hamburg 51980

- (1955). しかし、ホフマイスター版では、オリエント世界以下の具体的な歴史の議論については、ラッソン版をそのまま踏襲している。—, *Zweite Hälfte*, Bd. II-IV, *Philosophische Bibliothek* 174b-d, ²1976 (1919, ²1923).
- (6) ヘーゲル『歴史哲学』上・下巻、武市健人改訳、岩波書店、1954年。ヘーゲル『歴史哲学』上・中・下、武市健人訳、岩波文庫、1971年。
- (7) ヘーゲル『歴史哲学講義』上・下、長谷川宏訳、岩波文庫、1994年。この訳は、グロックナー版に依拠したとしている。
- (8) 1817年に公刊された『エンチュクロペディー』初版では、「C. 精神の哲学」「第2部 客観的な精神」の「C. 人倫」の内部で、「特定の人民精神」が「時間」のうちであり、「みずからの特殊な原理によって規定された「現実態の展開」を持つ点に、「歴史」があるとするだけで、世界史の展開そのものに言及することがない。Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Encyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*, Heidelberg 1817, § 448-452, S. 276-278. この版は、Googleを通じ、オックスフォード大学提供の電子データで参照した。しかし、同年冬学期に行われた「自然法と国家学」講義では、オリエント、ギリシア、ローマ、ゲルマンという領域進展を行う世界史が語られる。Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 1, *Vorlesungen über Naturrecht und Staatswissenschaft*, Heidelberg 1817/18, mit Nachträgen aus der Vorlesung 1818/19, Nachgeschrieben von P. Wannenmann, hrsg. v. C. Becker et al., Felix Meiner Verlag, Hamburg 1983, § 164-170, S. 256-264. G. W. F. ヘーゲル『自然法と国家学講義——ハイデルベルク大学 1817・18年』、高柳良治監訳、法政大学出版局、2007年、277～287頁参照。ヘーゲルの『法の哲学要綱』での「世界史」の枠組は、この講義で表明された考え方と基本的に同一である。Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 7, *Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse*, Mit Hegels eigenhändigen Notizen und den mündlichen Zusätzen, Theorie Werkausgabe, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970, § 341-360, S. 503-512.
- (9) 『全集』第18巻には、「世界史の哲学の1822年から1828年にかけての導入論」、「世界史の哲学の1830年から1831年にかけての導入論」、「世界史の哲学についての書きつけ」というヘーゲルの手稿と、「オリエントの歴史について」という二次伝承文献が収録されている。Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Gesammelte Werke*, Bd. 18, *Vorlesungsmanskripte II (1816-1831)*, hrsg. v. W. Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1995, S. 121ff., S. 138ff., S. 208ff., S. 221ff.
- (10) 1822/23年冬学期、1824/25年冬学期、1826/27年冬学期、1828/29年冬学期の講義科目名は、いずれも、ラテン語で *Philosophiam historiae universalis*、ドイツ語で (Die) *Philosophie der Weltgeschichte* であるが、1830/31年冬学期の講義科目名は、ラテン語で *Philosophiae historiae universalis partem priorem*、ドイツ語で *Den ersten Teil der Philosophie der Weltgeschichte* であって、ここでは「第一部」として、おもに「世界史の哲学」の導入論を仕上げようとしたと見られるが、イエシユケによれば、やはりこの学期にも「世界史」の全体を講義している。Vgl. „Hegels Vorlesungs-Ankündigungen in Berlin“, in: *Briefe von und an Hegel*, hrsg. v. J. Hoffmeister, Bd. IV, T. 1, *Dokumente und Materialien zur Biologie*, hrsg. V. F. Nicolin, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1977, S. 115-124. Vgl. W. Jaeschke, *Hegel-Handbuch, Leben—Werk—Schule*, Verlag J. B. Metzler, Stuttgart-Weimar 2003, S. 400f.
- (11) 検索にあたっては、加藤尚武編成・石川伊織校正のデータベースを利用し、Hegelianerの提供する検索ソフト Easy Checker (Ver.2.1)を利用した。ちなみに、このほかに、Astrolog (占星術)は、「インド」論で1箇所出現する (*Suhrkamp*, 193; *Lasson*, 385)。なお、ラッソン版では都合4回である。加わる1箇所については、後出イルティング版対訳【3】【8】および註28を参照のこと。
- (12) ガンス版にあった「天文学的な関係」(*Gans*, 171)は、カール・ヘーゲル版ではテキストが入れ替えられることにより消失している (*Karl Hegel*, 200)。
- (13) Vgl. *Karl Hegel*, S. 200; *Suhrkamp*, S. 204; *Lasson*, S. 358. 武市訳、231頁。引用は武市訳による。
- (14) 『大辞林』第二版(三省堂)によれば、「天文学的数字」とは、「天文学で扱うような桁数の大きな数字」。

- 実生活からかけ離れた大きな数字。」のことである。
- (15) Vgl. *Karl Hegel*, S. 201; *Suhrkamp*, S. 205; *Lasson*, S. 359f. 武市訳、232頁。引用は武市訳を若干改めた。
- (16) Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 12, Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Berlin 1822/1823, Nachschriften von Gustav Julius von Griesheim, Heinrich Gustav Hotho und Friedrich Carl Hermann Victor von Kehler, hrsg. v. K.-H. Iltling, K. Brehmer und H.-N. Seelmann, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1996 (abgek. *Iltling*).
- (17) „Philosophie der allgemeinen Weltgeschichte, vorgetragen von Hegel im Winterhalbjahr 1822/23“, nachgeschrieben von Karl Gustav Julius v. Griesheim.
- (18) „Philosophie der Weltgeschichte, nach dem Vortrag des Herrn Professor Hegel im Winter 1822/23“, Berlin, Heinrich Gustav Hotho.
- (19) „Die philosophische Weltgeschichte“, von Friedrich Carl Hermann Victor v. Kehler.
- (20) Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818–1831*, Ed. v. Karl-Heinz Iltling, 4 Bde., frommann-holzboog, Stuttgart-Bad Cannstatt 1973–1974.
- (21) G. W. F. Hegel, *Die Philosophie des Rechts, Die Mitschriften Wannemann (Heidelberg 1817/18) und Homeyer (Berlin 1818/19)*, hrsg. v. Karl-Heinz Iltling, Klett-Cotta, Stuttgart 1983. このなかで、イルティンクは、1818/19年の講義を編集するさい、ヴァネンマンとホームイヤーのノートを集積するという方法を採用した。
- (22) ベルリン国立図書館蔵 (MS. GERM. QU. 550, 551)。このマイクロフィルムは、1996/97年に跡見学園女子大学の助成によりベルリン大学で在外研究したさいに取得した。グリースハイム・ノートの概要については、次を参照のこと。Eva Ziesche, *Der Handschriftliche Nachlass Georg Wilhelm Friedrich Hegels und die Hegel-Bestände der Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz*, Teil 1 und 2, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden 1995, S. 252–255.
- (23) ヘーゲルは、Ramajanaをフランツ・ボップ (Franz Bopp 1791–1867) の訳で読んでいるとイルティンク版は指摘する (*Iltling*, 575)。Vgl. Franz Bopp, „Wiswamitra’s Büßungen, Eine Episode aus dem Ramajana, Aus dem Sanskrit im Versmaaße des Originals getreu übersetzt“, in: *Über Conjugationssystem der Sanskritsprache im Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen, germanischen Sprache*, hrsg. u. mit Vorerinnerungen begleitet von Karl Joseph Windischmann, Frankfurt am Main 1816 (reprint: Georg Olms Verlag, Hildesheim / New York 1975), S. 159–235. なお、ボップは、1821年、ベルリン大学にオリエント文学及び一般言語学の教授として就任。Vgl. *Briefe von und an Hegel*, Bd. IV, T. 2, Nachträge zum Briefwechsel, Register mit biographischem Kommentar, Zeittafel, hrsg. v. F. Nicolini, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1981, S. 145. ヘーゲルは、ボップと親交があり、次の2書の寄贈を受けている。Fr. Bopp, *Vergleichende Zergliederung des Sanscrit und der mit ihm verwandten Sprachen*, Berlin 1824. —, *Ardschuna’s Reise zu Indra’s Himmel nebst andern Episoden des Maha-Bharata, in der Ursprache zum erstenmal herausgegeben, metrisch übersetzt, und mit kritischen Anmerkungen versehen*, Berlin 1824. Vgl. *Verzeichniß der von dem Professor Herrn Dr. Hegel und dem Dr. Herrn Seebeck, hinterlassenen Bücher-Sammlungen*, Berlin 1832, S. 28. このオークション・カタログについては、加藤尚武氏に参看させていただいた。
- (24) 「この計算を分数でしなければ」は、ホトーでは「分数を全体の数とみなすと」。「ユガ」ないし「カルパ」の意味で理解するには、ホトーのテキストの方がわかりやすいであろう。
- (25) 「惑星」は、ホトーでは「星辰」。
- (26) 「並ぶ」は、ホトーでは「見出される」。
- (27) 「告げようと試み」は、ホトーでは「計算し」。
- (28) 「天文学システム」は、ガンス版、カール・ヘーゲル版、ズーアカンプ社版にはない。ラッソン版にはある。Vgl. *Lasson*, 2–360.

- (29) 校訂により、ganz が省かれている。
- (30) 校訂により、desto に改められた。
- (31) イルティング版によると、次を参照とのこと。Arrian, *Alexanders des Grossen Siegeszug durch Asien*, S. 406. アッリアノス『アレクサンドロス大王東征記』上・下、大牟田章訳、岩波文庫、2001年。
- (32) 校訂により、dem に改められた。
- (33) ヘーゲルは、イギリスのアジア協会 (Asiatic Society) 刊行の『アジア研究 (*Asiatic Researches*)』を読んでおり、コールブルックの次の論文を参照していると思われる。H. T. Colebrooke, “On Ancient Monuments, containing Sanscrit Inscriptions”, in: *Asiatic Researches, Comprising History and Antiquities, the Arts, Sciences, and Literature of Asia*, Vol. 9, 1811 (Reprint: Cosmo Publications, New Delhi 1979), p. 398-452. この冒頭で、コールブルックは、石や金属に刻まれた碑文に接することの重要性を説く。これによって、統治した時代を確定できるからである (p. 399)。また、碑文が「古代文字または通常用いられない文字」で記されているとする (p. 401)。
- (34) ヘーゲルは、ここから、ウィルフォードの次の研究を祖述しようとしている。Captain F. Wilford, “An Essay on the SACRED ISLES in the West, with other Essays connected with that work”, in: *Asiatic Researches*, Vol. 9, 1811, p. 32-243. この論文は、主に3つの論文 (第2論文～第4論文) を収めており、第4論文が、“VICRAMADITYA and SALIVAHANA; their Respective Eras, With an Account of the Bala-Rayas or Balhar Emperors” (p. 117-243) であり、Vicramáditya を主題にしている。このことのイルティング版の指摘がある (*Ilting*, 593f.)。
- (35) Francis Wilford, 1822年没。東インド会社の将校。Vgl. *Lasson*, S. 361.
- (36) ヘーゲルは、ウィルフォードの前掲論文 (p. 134f.) を祖述するかたちで、[3]～[5]の議論を行っている。
- (37) ベントリは、インドの天文学者ヴァラーハミヒラ (Varáha Mihira) がどの時代の人物かを論ずるさいに、Vicramaditya を紀元前 56 年としており、ヘーゲルは、これにより「Vikrama 紀元」(紀元前 56-8 年頃) があることを知っている。Vgl. J. Bentley, “On the Hindu Systems of ASTRONOMY, and their connection with History in ancient and modern times”, in: *Asiatic Researches*, Vol. 8, 1809, p. 198. ガンス版では、この箇所を「紀元前 56 年」としており (Gans, 178)、「Vikrama 紀元」を念頭に置いた可能性がある。なお、カール・ヘーゲル版で「紀元前 50 年」に直っており (*Karl Hegel*, 202)、ラッソン版もズーアカンプ社版も同様である (*Lasson*, 362; *Suhrkamp*, 206)。
- (38) 註 34 のウィルフォードの第 4 論文冒頭で (p. 117) で、イルティング版の【6】[4]に関わり Vicramáditya の人数を「4 名」ないし「8～9 名」としており、グリースハイム・ノートの記述に対応する。また、引き続きの箇所 (p. 118) で、【6】[5]～【7】[2]の下敷きになる記述があり、ヘーゲルは、そこでほぼこれを祖述している。
- (39) この「神像 (Gottheit)」は、ウィルフォードによると、Cálidévi である (p. 118)。
- (40) ホトー・ノートでは「特徴 (Zug)」とされる。
- (41) ein König einmal の並びは、校訂による。ノートでは、einmal ein König。
- (42) ウィルフォードによれば、ムハンマド (Muhammed) は、インドのある王の孫だとされており、したがって Vicramáditya と呼ばれることになる (p. 123)。イルティング版の指摘によれば、ウィルフォードは、ムハンマドをある王の息子が巡礼者として戻ってきたものとするインドの話を紹介している (*Ilting*, 594f.)。「恥ずかしく汚い」話とは、その巡礼者がパラモンの娘とのあいだに子を授かる話である。この巡礼者がムハンマドだとされ、Vicrama と称されることになるが、このことについて、ウィルフォードは、インド人は、Sultan-Mahmood と混同しているとする (p. 159-160)。
- (43) イルティング版の註は、Bentley の論文の指摘のみである。註 45 参照。
- (44) ラッソン版では、おそらくグリースハイム・ノートに基づき、「精確 (genau)」という表現がなされているから、本文指摘の矛盾に気づきうる。Vgl. *Lasson*, 2-360.
- (45) イルティング版の文献表には、次のものが挙げられている。Bailly, Jean Sylvain, *Traité de l'Astronomie indienne et orientale*, Paris 1787. —, *Histoire de l'Astronomie ancienne*, Paris 1775 (in deutscher

- Übersetzung: *Geschichte der Sternkunde des Altertums bis auf die Errichtung der Schule zu Alexandrien*, 1. Bde, Leipzig 1777). Bentley, J., “On the Hindu system of astronomy, and their connection with history in ancient and modern time”, in: *Asiatic Researches*, vol. VIII, Calcutta 1805, p. 193-244.
- (46) デイヴィッド・E・ダンカン『暦をつくった人々——人類は正確な一年をどう決めてきたか』松浦俊輔訳、河出書房新社、1998年、292, 302, 344頁参照。
- (47) *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*, in 32 Teilbänden, Leipzig 1854-1960, Bd. 2, Sp. 409.
- (48) 矢野道雄『『アールヤバティーヤ』解説』、『科学の名著1 インド天文学・数学集』矢野道雄編集、朝日出版社、1980年（以下本書を「矢野」という）。
- (49) 註37に掲げたベントリの論文参照。ベントリは、この論文以前に、次の論文を公刊している。J. Bentley, “On the Antiquity of the Suryá Siddhanta and the Formation of the Astronomical Cycles therein contained”, in: *Asiatic Researches*, vol. 6, Calcutta 1809, p. 540-593. ここでは、60進法と24時間制が併用されている。
- (50) 矢野、前掲書所収。
- (51) Cf. Bentley, “On the Hindu system ...”, p. 218.
- (52) Cf. *ibid.*, p. 236. Cf. Bentley, “On the Antiquity ...”, p. 550, 553.
- (53) Cf. *ibid.*, p. 557.
- (54) 矢野道雄『密教占星術——宿曜道とインド占星術』、東京美術、1986年、28頁、117頁参照。
- (55) Cf. *ibid.*, p. 541. ヘーゲルは、「世界史の哲学の1830年から1831年にかけての導入論」において、バイイに言及しており、その書を読んだと思われる。Vgl. Hegel, *Gesammelte Werke*, Bd. 18, S. 189. なお、1827年の「宗教哲学講義」でもバイイの議論に触れている。Vgl. G. W. F. Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 4, Vorlesungen über die Philosophie der Religion, Teil 2, Die bestimmte Religion, hrsg. v. W. Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1985, S. 428. ヘーゲル『宗教哲学講義』山崎純訳、創文社、2001年、141頁参照。このさい、中国人やインド人であったとみられる古代の見識の完全性というバイイの想定をドランプルが批判したことも、ヘーゲルは指摘する。ドランプルの批判書については、イエシユケは次を挙げる。[Jean Joseph] Delambre, *Histoire de l'astronomie ancienne*, 2 Bde., Paris 1817. Vgl. Hegel, a. a. O., S. 747.
- (56) Cf. Bailly, *Traité de l'Astronomie indienne et orientale*, 1787, p. lxxiv. なお、本書は、Googleを通じ、ゲント大学提供の電子データで参照した。
- (57) ラッソンは235に訂正している。Vgl. *Lasson*, 2-360.
- (58) Cf. Bentley, *op. cit.*, p. 549f.
- (59) ベントリの「インドの天文学体系について」では、次を参照のこと。Bentley, “On the Hindu system ...”, p. 199. アクセントは、この論文による。
- (60) Cf. *ibid.*
- (61) “Brohma Siddhanta, Vishnu Siddhanta, Bhasvoti Drubo Rothono, Chondrika, &c”. Cf. Bentley, “On the Antiquity ...”, p. 550.
- (62) Cf. Bentley, “On the Hindu system ...”, p. 209f.
- (63) ヘーゲルは、「世界史の哲学の1830年から1831年にかけての導入論」において、「天文学的知識の状態」は、「歴史的な基礎づけとならない前提」とする。Vgl. Hegel, *Gesammelte Werke*, Bd. 18, S. 189f.